徳川美術館 特別展

尾張徳川家の雛まつり

令和４年２月５日（土）～４月３日（日）

主催　徳川美術館　名古屋市蓬左文庫　中日新聞社
会場　徳川美術館 本館
協力　名古屋市交通局

江戸時代の尾張徳川家の姫君のためにあつらえられた、気品に満ちた有職雛（ゆうそくびな）や、婚礼調度のミニチュアである雛道具は、いずれも御三家筆頭の名にふさわしい質の高さを誇ります。また明治から昭和にいたる尾張徳川家３世代の夫人たちの豪華な雛段飾りにも、各時代の技術の粋が結集されています。連綿たる歴史が感じられる尾張徳川家ゆかりの雛人形・雛道具の数々をご堪能ください。

尾張徳川家伝来の雛人形

矩姫（かねひめ）の有職雛

矩姫（貞徳院（ていとくいん）・1831 ～ 1902）は福島・二本松丹羽（にわ）家10代長富（ながとみ）の３女として生まれ、嘉永２年（1849）に慶恕（よしくみ）（後の尾張徳川家14代慶勝（よしかつ））にお嫁入りしました。

矩姫の雛人形は、束帯（そくたい）姿３対・直衣（のうし）姿１対・狩衣（かりぎぬ）姿１対の有職雛（公家の装束を正しく考証して作られた雛人形）で、高さはおよそ30センチあります。当時製作された大名家のお雛様のなかでも、ひときわ格調高い作品です。

▲有職雛（直衣姿・五人囃子のうち3体）

また矩姫は、５対の小型の雛人形も所持していました。江戸時代後期の将軍家や御三家では、雛飾りが大奥の2～3箇所にしつらえられたといわれています。この小型の雛人形の箱には「御内証（ごないしょう）」の貼札があり、プライベートな場で飾られたと考えられます。

◀有職雛（御内証）

尾張徳川家伝来の雛道具

鉄線唐草蒔絵雛道具

徳川美術館に伝えられた最も古い雛道具で、17 世紀末から 18 世紀初頭頃に製作されたと考えられています。本来の所用者はわかりませんが、懸盤（お膳類）と行器（食べ物を入れる器）は、19 世紀には尾張徳川家 11 代斉温継室である福君が所持していました。

鉄線唐草蒔絵雛道具 懸盤

菊折枝蒔絵雛道具 －福君の雛道具－

福君の雛道具の一つで、梨子地に菊の折枝を配し、所々に近衛家の家紋である抱牡丹紋と徳川家の葵紋を散りばめたデザインを施し、金具にはすべて銀が用いられています。福君の婚礼調度として伝来する、等身大の菊折枝蒔絵調度の諸道具と遜色のない精巧な出来映えを示しています。

本展覧会では、福君の婚礼調度内の「将棋盤」と、雛道具内の「将棋盤」を並べて展示しています。

菊折枝蒔絵雛道具 将棋盤

抱牡丹紋 散 蒔絵雛道具 －福君の雛道具－

抱牡丹紋散蒔絵雛道具 乗物

「菊折枝蒔絵雛道具」とともに、福君が所持した雛道具です。梨子地に金具と蒔絵によって、近衛家の家紋である抱牡丹紋を配し、金銅製の金具を打っています。豪華さと格調の高さに独特の趣きがあります 。

松 竹 梅唐草蒔絵雛道具 －矩姫の雛道具－

矩姫の雛道具です。梨子地に松竹梅の折枝と唐草文様を配し、銀の金具を打った豪華な仕様です。その数は80 点余りにおよび、当時の婚礼調度のありさまをよく伝えています。

松竹梅唐草蒔絵雛道具 四種盤

牡丹唐草蒔絵雛道具

定かではありませんが、もとは 11 代将軍徳川家斉が愛玩した雛道具で、のちに故あって矩姫の所持するところとなったと伝えられています。

明治時代以降の雛人形・雛道具

尾張徳川家３世代にわたる雛段飾り

徳川美術館の創始者である尾張家 19 代義親の夫人米子（1892 ～ 1980）、20 代義知の夫人正子（1913 ～ 98）、そして 21 代義宣の夫人三千子（1936 ～）の 3 世代にわたる尾張徳川家の雛段飾りです。数組の内裏雛を上段にすえ、三人官女・五人囃子をはじめ、節供の祝儀としてさまざまな方々から贈られた御所人形・毛づくり人形などの人形、さらに多種多様の道具揃えが並べられ、江戸時代後期以降の大名家の雛段飾りのありかたがよく示されています。

秩父宮妃殿下の内裏雛飾り

秩父宮勢津子妃（1909 ～ 95）は、幕末に活躍した会津松平家9代容保の孫で、昭和3年（ 1928）に秩父宮雍仁親王と結婚しました。勢津子妃が亡くなると、雛飾りは尾張徳川家 20 代義知に嫁いだ妹の正子に贈られました。

男雛の冠は立纓で、装束は天皇にのみ許される黄櫨染の上衣を着用しており、皇室にふさわしい格式のある雛飾りです。

修理後初公開！

矩姫の有職雛は、今年で 35 回目を迎える 本展覧会にて毎年飾られてきた優品で、大名家に相応しい気品に満ちています。しかし作られてから 190 年近くが過ぎ、このうち一体の男雛の髪や装束に、黒色に染める過程で使われる鉄分等を原因とした著しい損傷があったため、昨年、修理を行いました。修理に際しては、元の素材を可能な限り残し、雰囲気を損なわないことに細心の注意を払いました。髪を結い直し、新調した黒色の装束を身に着けた男雛の、晴れ晴れとした姿をご覧ください。

修理前

修理後

用語解説

黒棚 (くろだな) Kurodana

江戸時代の婚礼調度に欠かせない三棚のうちの一つで、主に女性の化粧道具を飾る。厨棚 (台所棚) から発生したといわれ、室町時代に厨子棚と共に成立した。上段から一の棚・二の棚・三の棚・四の棚の四段からなり、二と三の棚の間に観音開きの扉がつく局がある。

厨子棚 (ずしだな) Zushidana

三棚のうちの一つで、手箱・香道具・硯箱などを飾る。平安時代の公家の調度であった二階棚と二階厨子が変化して、室町時代に成立していたといわれている。黒棚と同じく四段からなり、一の棚は左右の両端が端反りで、二と三、三と四の間の二箇所に局がある。

書棚 (しょだな) Shodana

三棚のうちの一つで、飾り付けには特別な決まりがなく、冊子や巻物を飾る。厨子棚・黒棚が室町時代に形式が定まったのに対して、書棚は江戸時代初期になって婚礼調度に加えられた。形態や大きさも幾分自由であり、最下段には二本引または四本引の引戸が付く。

挟箱 (はさみばこ) Hasamibako

外出の際に必要な衣類・調度・装身具を納めて従者に担がせる箱である。方形で被蓋造、棒を蓋の上に通して肩に担ぐ。近世の武家独自の旅行用具である。語源は昔、衣服を竹に挟んで運んだためという。大名行列では、先頭を挟箱が行くため先箱とも呼ぶ。

貝桶 (かいおけ) Kaioke

ハマグリの貝殻を合わせる遊び「貝合わせ」に用いる合貝を納める。二枚貝は特定の一片としか合わないため、合貝とそれを納める貝桶は、貞節の象徴として婚礼道具の中で最も大切にされた。

長持 (ながもち) Nagamochi

衣服・調度などを納める長方形の大型の箱である。吊り金具が両端に付き、棒を通して前後二人で担ぐ。大中小の大きさがあり、数個以上揃えられた。

耳盥 (みみだらい) Mimidarai

歯黒染に用いられる半球状の盥で、左右に耳状の把手が付く。渡金を耳盥の口縁に渡し、その上で鉄漿 (お歯黒の材料の一つ) を溶く。

広蓋 (ひろぶた) Hirobuta

衣服用の大型の盆である。元来は衣服を入れる箱の蓋の転用であったが、発展して蓋のみを作るようになった。衣服に限らず、贈答品や客人へ供する物品なども載せる。

楾・角盥 (はぞう・つのだらい) Hazō and Tsunodarai

うがいや手洗いなどに用いる道具である。角盥は半球状の盥に四本の角状の手が付くところからこの名称がある。二人でこの手をもって運ぶのに便利な構造で、水差しの楾と一対をなす。

行器 (ほかい) Hokai

食物を入れて運ぶ容器である。「ほがい」とも読み、外居とも書く。通常は二個一対で、外反りの四脚が付き、円筒形と四角柱形がある。身と蓋を紐で結び、棒を通して担ぐこともある。

指樽 (さしだる) Sashidaru

酒を入れる箱形の容器である。上部に注口をつける。